

日本人英語学習者の依頼ストラテジーに関する語用論上の転移可能性研究

——内観法による分析¹——

Pragmatic Transferability of Request Strategies:

A Qualitative Analysis by Introspective Methods

稲垣亜希子

Akiko INAGAKI

Abstract: This research combined a study of pragmatic transferability of indirect request strategies and introspective methods. The purpose of this study was to probe the cognitive process of Japanese learners of English as they answered the transferability judgment questionnaire created by Takahashi (1995). Data were collected by verbal reports from a think-aloud session and retrospective interviews and then analyzed. The following two questions were asked in this research: 1) How do three pragmatic knowledge sources (L1 influence, overgeneralization, and instructional effect) work in the cognitive process of the learners? 2) Does the learners' English proficiency affect their cognitive process during the task? As a result, besides the three knowledge sources mentioned above, "transfer of experiences" seemed to exist in the learners' cognitive process. Those four knowledge sources seemed to have different functions. Furthermore, the learners' process of judgment was influenced by their L2 proficiency. In the verbal reports of low L2 proficiency subjects, L1 influence frequently appeared. Low L2 proficiency subjects tended to rely on their L1 in judging the equivalence of Japanese and English indirect request strategies. They tended to focus only on the "forms" of the strategies and not to examine if the "functions" of the strategies were equivalent. In the verbal reports of high L2 proficiency subjects, several kinds of knowledge sources tended to appear. High L2 proficiency learners seemed to have more complex cognitive processes than low L2 proficiency learners.

1. 序論

中間言語語用論における語用論上の転移の研究の多くは、転移現象が確かに存在するということを立証してはいるものの、それがいつどのような条件の下に起こるかということに焦点を当てたものは少ない。結果の考察の段階において「転移の条件」についてふれるにとどまるものが大半である (Takahashi, 1996, pp. 190-193)。そのなかで唯一、語用論上の転移の条件そのものに焦点を当てた「語用論上の転移可能性」研究といわれるのが Takahashi (1996) の研究である (Kasper & Rose, 2002, p. 155)²。これは、どのような条件下で日本人英語学習者が日本語の間接依頼ストラテジーを英語のコンテキストに転移させる可能性があるかについて量的なアプローチにより示した研究である。語用論上の転移が生じた結果に注目するそれまでの「結果重視型」研究とは違った、転移が生じる思考過程に注目する「過程重視型」研究と位置づけることができる (Takahashi, 1996, p. 190)。

しかしながら、この研究は量的研究であり、142名の被験者についてアンケートをとり、語用論上の転移可能性を数値で示したものである。Takahashi (1995, p. 240; 2000, p. 14) 自身も指摘しているように、語用論上の転移可能性研究においてはさらに、言語報告等の研究方法を用いた、個別の被験者の思考過程を探るための質的研究が求められている。Takahashi (1996) で示された数量的な結果が質的にも裏づけられれば、語用論上の転移可能性についてさらに説得力の増した議論を展開することが可能になる。また、Kasper (2001, pp. 59-60) によって、教室内中間言語語用論研究における、言語報告等の研究方法の必要性が指摘されていること、さらに Kasper & Schmidt (1996, p. 165) によって、中間言語語用論研究と社会心理学研究の結びつきを強化するため内観法や民俗学的研究法の必要性が指摘されていることなどから、この分野についての質的アプローチの意義は高い。したがって、本研究では転移可能性の質的研究を行うこととした。

言語研究の質的なアプローチの代表的なものとしては、内観法が挙げられる。これは、主に心理学分野の研究に用いられてきた手法であるが、行動主義の全盛時には避けられてきたという歴史をもつ。しかし言語の認知過程についての研究が注目されてきたことにより、1970年代より再び脚光を浴びるようになった。客観性に欠けるなどの批判もあるが、さまざまな研究方法との併用によって、有効であるとの指摘があり、なかでも中間言語語用論の分野における内観法の有用性については、Robinson (1992, p. 69) が結論づけるとおりである。

本研究の目的は、語用論上の転移可能性について内観法による質的アプローチをとり、量的研究では成しえない個別の被験者の思考過程を探り出すことである。その際に、語用論上の転移可能性そのものに着目した研究として Takahashi (1996) を土台にした。日本人英語学習者の間接依頼ストラテジー³が英語コンテキストにどのような条件下で転移するかを調べるための判断タスクを被験者に課し、その際の思考過程を内観法によって探った。それにより日本人英語学習者の語用論的な知識の習得について何らかの示唆を行うことをめざした。

2. 研究課題と調査方法

(1) リサーチ・クエスション

- ① 日本人英語学習者が、与えられた英語コンテキストでの状況において適切とされる依頼ストラテジーを判断する際に、どのような思考過程をとっているのか。とくにその判断プ

ロセスにおいて、L1 influence (母語の影響)、overgeneralization (過剰般化の現象)、instructional effect (インストラクションの影響) がどのように作用しているのか。

② 上記において、学習者の英語習熟度は何らかの影響を及ぼしているのか。

(2) 定義

1) 語用論上の転移可能性

本研究における「語用論上の転移可能性」の定義は、本研究の基礎となっている Takahashi (1995; 1996) に従うものとする。Takahashi (1995; 1996) は、第2言語習得研究の枠組みで Kellerman (1983, p. 117; 1986, p. 36) が提唱した「転移可能性」の定義を基に、「語用論上の転移可能性」を“the probability with which a given L1 indirect request strategy will be transferred relative to other L1 indirect request strategies” (Takahashi, 1995, p. 64) と定義している。

また、この転移可能性は、以下に挙げる2種類の学習者の知覚を基に測られるものとする(詳細は Takahashi, 1995, pp. 64-65 を参照)。① L1 語用論的ストラテジーが、あるコンテキスト上において、どの程度適切か、② L2 のコンテキストにおいて、L1 とそれに対応する L2 のストラテジーの適切さが、どの程度同じであるか、の2点である。

2) 内観法

Introspective reports, think-aloud, retrospective reports の定義や分類方法については研究者によりさまざまな議論がなされているが (Grotjahn, 1987, pp. 54-55; Jourdenais, 2000, pp. 354-356; Green, 1998, p. 4)、本研究では、中間言語語用論の枠組みで内観法を用いた研究として最も頻繁に引用される Robinson (1992) にならい、「内観法」はすべてを包括する方法論と定義し、「言語報告」はそのためのデータ収集の方法の1つであると同時に、収集されたデータそのものを指すこととし、その具体的方法としてオンラインで行うものを「発話思考法」、事後に行うものを「回顧インタビュー」と定義し、議論をすすめることとする。

(3) 調査方法

1) 被験者

被験者は、都内の大学に通う女子大学生(大学1年生または2年生)22名で、平均年齢は18.8歳、6-14年の英語学習歴があり、英語圏の在住期間の平均は51.8日(1.7カ月)である。以上のバックグラウンドは、性別を除き、Takahashi (1995; 1996) の被験者群とほぼ同様である⁴。

また、それらの被験者を英語習熟度の高いグループと低いグループに分けた。英語習熟度は、本調査実施時期に3カ月ほど先立って行われた TOEIC のスコアの自己申告に基づく。被験者全員の平均点よりもスコアの高い者を英語習熟度の高いグループ(10名)、低い者を英語習熟度の低いグループ(12名)とした。

2) デザイン

①転移可能性判断アンケート記入、②発話思考法セッション、③回顧インタビュー(詳細については第4項参照)。

3) 素材

Takahashi (1995; 1996) で作成・使用された転移可能性判断アンケートを使用した(付録A: 転移可能性判断アンケート [セクションA: L1 適切性知覚、セクションB: L1-L2 等価性知覚] 参照)。アンケートは、「依頼」行為の4つの状況(場面設定)により構成されている(Takahashi,

1996, p. 222 参照)。それらの4つの状況は、依頼負荷の低いものと高いものに分かれている。

またアンケートではそれぞれの状況がセクションAとセクションBに分かれており、セクションAは日本語コンテキストに対しての日本語「依頼」ストラテジーの適切性判断タスクとなっている。セクションBは英語コンテキストに対しての日本語「依頼」ストラテジーについて、慣用的 (conventional) に相当する英語「依頼」ストラテジーと、統制群として機能的 (functional) に相当する英語「依頼」ストラテジーがどの程度同じ適切さを表しているかを測る等価性判断タスクとなっている (Takahashi, 1996, p. 200 参照)。以上の日英依頼ストラテジーの例は表1に示したとおりである (表1. 依頼ストラテジー日英対照表 [抜粋])。被験者には、いずれのセクションについても、-3から3までの7段階の評価を行うよう依頼した⁵。

4) 手順

データ収集は、すべて験者対被験者の1対1で、大学の研究室内と小教室内で行った。験者より簡単なスケジュールの紹介を行い、そのあと、発話思考法と回顧インタビューの方法についての説明と簡単なシミュレーションを行った (付録B: 転移可能性判断アンケート時配布資料内容 [調査手順] 参照)。これに続いて被験者は発話思考法によるアンケートの記入を約15分～20分程度で行ったが、その様子はすべて験者がカセット・テープに録音した。テープ録音済みの言語報告は、験者が巻き戻し後再生し、再生刺激法による回顧インタビューを行った。このセッションには約30分～40分程度を費やし、その様子も験者がすべてMDに録音した。

回顧インタビューのセッションでは、Ericsson & Simon (1984, p. 198) の概念を応用した Robinson (1992, pp. 47-48) の質問形式を基本的に採用したが、本研究は語用論的 knowledge source を探ることが目的であることから、本研究ではそのための質問形式も追加した。

また、データ収集の際使用される言語については、被験者の頭に浮かんだ言語をそのまま使用することが望ましい (Kasper & Rose, 2002, p. 111) と指摘されていることから、あえて事前の指示を行わなかった。結果としてすべての被験者が、L1である日本語を用いて言語報告を行った⁶。

5) データ分析方法

まずアンケートの分析を行い、Takahashi (1996, p. 201) に基づいて被験者の回答からそれぞれのストラテジーについての転移可能性値を算出した⁷。また言語報告の音声データはすべて書き起こし、その中に knowledge source にかかわる8種類の分類項目が認められたため、これに基づいた分類を行った。分類は験者と他1名の2名で行い、評定者間 (interrater) の一致度が70.23%となったため、分類は妥当であると判断した。最も転移可能性値が高い equivalent pairs の言語報告と、最も低い equivalent pairs の言語報告を抽出し、おのおのを分析することによって転移を生じる原因について探った。

3. 分析結果・考察

転移に関して Thomas (1983, pp. 101-103) によって示された「母語の影響」、「過剰般化の現象」、「インストラクションの影響」の3要素について、とくに注目して分類項目を立て、言語報告を分類した。その結果、表2に示す8種類の項目が認められた (表2. 分類項目と定義)。先に設定したリサーチ・クエスチョンに従って考察を加えながら、分類項目別、被験者別の2側面から分析結果を示す⁸。

表 1. 依頼ストラテジー日英対照表 (抜粋)

日本語ストラテジー	L2 Conventional Equivalents(in CEP)	L2 Functional Equivalents(in FEP)
1. ～していただけないでしょうか	Would/Could you please…?	Would it be possible…?
2. ～してもらえないでしょうか	Would/Could you…?	Do you think you can …?
3. ～していただきたいんですけど	I would like you to….	I was wondering if you could….
4. ～してほしいんですけど	I want you to….	Would you…?
5. 非慣用法	There seem to be three grading mistakes on my exam.	I was wondering if these three answers might not be correct.

(Takahashi, 1996, p. 200)

(1) 分類項目 (coding category) 別分析結果

リサーチ・クエスチョン①について検証するため、分類項目別に分析結果を示す。

1) 母語の影響 (L1 influence)

a) L1-L2 慣用的等価性 (L1-L2 conventional equivalence)

定義：機能が目標規範のものと異なっている場合でも、L1-L2 convention が同じであり、使用できるという判断が働いているとみられる場合。

典型例：機能の違う L1 と L2 の言語形式を、L1 の訳（日本語訳）を媒介として比較し、同等であると判断する、など。

出現状況：ほぼすべての被験者に顕著。転移可能性値が最も低い、すなわち最下位となった equivalent pairs の言語報告中には現れることが少ない。

以上の分析から、「L1-L2 慣用的等価性」には、1 語 1 語を対照させ「言語形式」を検証する段階と、同等と判断する段階の間に、「機能」が同等であるかということを検証する段階が存在していないことがわかる。例えば、「いただけないでしょうか」と would you という機能の違うこれらの表現を、訳が同じであるため機能も同じであると判断してしまうなどのケースがこれにあたる。

b) 母語のシステムの適用 (Application of L1 system)

定義：L1 特有のルールや特徴を L2 に当てはめようとしている場合⁹。

典型例：英語に存在しない「敬語」システムを適用しようとしている、日本語の謙譲語の概念を適用している、など。

出現状況：3 名。

この「母語のシステムの適用」は少数の被験者のみに観察されたこと、さらに、実際複数の被験者の言語報告中に「英語には敬語がない」という発言が観察されたことから、英語には日本語特有の敬語システムが存在しないため、単純にそれを英語コンテキストに適用することはできないというメタ語用論的知識がすでにある程度学習者に共有されているということも考えられる。

2) 過剰般化 (Overgeneralization)

a) 語用言語学的過剰般化 (Pragmalinguistic overgeneralization)

定義：L2 のルールや特徴を拡大解釈し、言語形式 (form) と機能 (function) の写像 (mapping) について自らのルールを作り上げている場合。

表 2. 分類項目と定義

Knowledge Sources		定義
母語の影響	L1-L2 慣用的等価性	・機能 (function) が目標規範のものと異なっている場合でも、L1-L2 convention が同じであり、使用できるという判断が働いているとみられる場合
	母語のシステムの適用	・L1 特有のルールや特徴を L2 に当てはめようとしている場合
過剰般化	語用言語学的過剰般化	・L2 のルールや特徴を拡大解釈し、言語形式 (form) と機能 (function) の写像 (mapping) について自らのルールを作り上げている場合
	社会語用論的過剰般化	・L2 のルールや特徴を拡大解釈し、ある言語形式 (form) の使用場面や相手などについて自らのルールを作り上げている場合
インストラクションの影響	直接	・ソース (source) を明らかにし、直接「教わった」と言及がある場合
	教材	・ソースが教材であると言及している場合
	間接	・ソースが明らかではなく、教室内で「聞いたことがある」等と曖昧な場合、また「教わった」かどうかを明言していない場合
経験の転移		・自らの経験 (教室外) についての言及がある場合

典型例：丁寧度に関する写像、とくに過去形の法助動詞と please の関係について。

出現状況：「L1-L2 慣用的等価性」に次いで多く、さまざまな場所に散見される。

「語用言語学的過剰般化」として最も顕著であった丁寧度に関する写像を詳細に分析すると、被験者が示した写像には主に次の 2 つの特徴があることがわかった。第 1 に、多くの被験者の示した写像が相対的 (relative) なものであるということである。例えば、「will が would になるとより丁寧である」や「would に please がつくるとより丁寧になる」のような、それぞれの形式同士の相対的な機能の写像に関しては大半の被験者に共通なものが完成してはいるものの、「would だけで十分丁寧である」という写像において、「十分」とはどの程度の丁寧さを示しているのか、具体的な基準が明確にされていないのである。

第 2 に、丁寧度について絶対的 (absolute)¹⁰な写像を行っていると思われる被験者は、大半が日本語の訳を介在させているということである。例えば、『もう一度見直してもらえないでしょうか』で would you って同じにして、それに please がついたから、たぶん『ただけないでしょうか』になったのかな』というように、would you に please が加わるとより丁寧になるという相対的写像を、日本語の訳を介在させることによって絶対的な写像にしている。これは、日本語を介在させている点で「母語の影響」が起こっているとも説明でき、「母語の影響」と「語用言語学的過剰般化」が共起している例といえる。

b) 社会語用論的過剰般化 (Sociopragmatic overgeneralization)

定義：L2 のルールや特徴を拡大解釈し、ある言語形式の使用場面や相手などについて自らのルールを作り上げている場合。

典型例：may の使用範囲を「友達同士なら使用できる」と自ら設定しているような場合。

出現状況：頻度は低い。大半の出現場所は転移可能性値が最も低い equivalent pairs の言語報告中である。共起する knowledge sources は多岐にわたる。

以上のことから、日本人英語学習者が行う社会的変数に関する写像は、日本語依頼表現の L2 コンテキストへの転移には大きく作用していない、または依頼行為を行う場合、社会的変数に関する写像についての認識が低いということがいえる。すなわち、転移が起こりにくく

なる要因の一つは社会的変数を考慮に入れることであるといえる。これは、社会語用論的発達 (sociopragmatic development) に関して、メタ語用論的ディスカッションがない場合よりもある場合のほうがよいとの結果が出た研究 (Rose & Kwai-fun, 2001, pp. 167-168) を、部分的に支持しているともいえる。メタ語用論的ディスカッション、この場合はそのなかでもとくに社会的変数について、何らかの形で「意識」されている場合には、転移が起こりにくいと一般化することができるのではないだろうか。

「語用言語学的過剰般化」と「社会語用論的過剰般化」の出現位置、頻度などから、それらの作用を総合的に考察すると、日本人英語学習者の依頼行為における「語用言語学的過剰般化」は、次の2点について働くものであると考えられる。第1に、無標 (unmarked)、言い換えれば「標準的」な状況下における、言語形式と丁寧度に関しての相対的写像を作り上げること、そして第2に、その無標状況下での写像をこのアンケートに示された特定の状況 (有標) に対しても適用しようとする行為であるといえる。一方「社会語用論的過剰般化」は、ある有標 (marked) な状況では、使用すべき言語形式が変わるということについての認識を、被験者が少なからずもっている場合に起こるが、その言語形式の使用範囲については、目標規範と異なっていることであるといえる。すなわち、前者は言語使用に関して有標と無標の区別を認識しておらず、後者は言語使用に関して有標と無標の区別は認識しているということになり、少なくとも後者の、有標と無標の区別をもつ場合には転移可能性が低いといえることができる。

3) インストラクションの影響 (Instructional effect)

a) インストラクションの直接的影響 (Direct instructional effect)

定義：ソース (source) を明らかにし、直接「教わった」と言及がある場合 (ソースとは、中学校の授業、または塾などの教室内であるか否かを指す)。

典型例：「丁寧にするには please をつけるとよい」「will や can が would や could になるとより丁寧になる」「依頼するときには please をつける」など。

出現状況：語用言語学的過剰般化と隣接して現れることが多い。全被験者 (22 名) 中 9 名に現れ、1 例を除いてはすべて転移可能性値が最高値をつけた equivalent pairs の言語報告内に出現している。FEP ではなく CEP¹¹ の言語報告に現れていることが多い。

b) 教材の直接的影響 (Direct effect of teaching materials)

定義：ソースが教材であると言及している場合。

典型例：「文法問題」「例文」「教科書」など。

出現状況：4 名。「インストラクションの直接的影響」と隣接している場合が多い。

c) インストラクションの間接的影響 (Indirect instructional effect)

定義：ソースが明らかではなく、教室内で「聞いたことがある」などと曖昧な場合、また「教わった」かどうかを明言していない場合。

出現状況：1 カ所。

まず、「インストラクションの直接的影響」が「語用言語学的過剰般化」と隣接することが多いという結果をさらに詳しく分析すると、「語用言語学的過剰般化」の起こったあとの、験者による「それはどこからそう思いましたか」などの質問に対してインストラクションについて述べた言語報告が出現することが多く、「語用言語学的過剰般化」のさらなる源としてインストラクションが存在していることがわかる。とくに、先述のとおり「語用言語学的過剰般化」は無標の状況下においての写像を作ることであると考えれば、インストラクションはその無標な状況下で

の写像を作りだす源となっていると考えられる。これが Takahashi の指摘する第 1 の役割、すなわち “establishing *general and rudimentary* correspondence between Japanese and English request expressions” (Takahashi, 1996, p. 213) であるといえるのではないだろうか。

また第 2 の役割についてであるが、「インストラクションの影響」が 1 例を除いてはすべて転移可能性値が最高値を示した英語依頼表現の言語報告中に出現していることから、言い換えれば、「インストラクションの影響」が現れた場合に、L1-L2 の等価性が高いと被験者が認めているということになる。また、現れた場所は FEP ではなく CEP のほうに多い。つまり、「インストラクションの影響」が L1-L2 の等価性を高める一因として作用し、なおかつ「機能」ではなく「慣用法」を転移させる（すなわち「負の転移」の）ための一因となっていることが明白であるため、Takahashi の指摘する通り、第 2 の役割、すなわち “triggering and strengthening the projection of L1 request conventions onto L2 contexts” (Takahashi, 1996, p. 213) を果たしているといえる。

4) 経験の転移 (Transfer of experiences)

定義：3つの knowledge sources (「母語の影響」「過剰般化」「インストラクションの影響」) のいずれにも相当しないと判断された、自らの経験についての言及がある場合。

典型例：ある言語形式の使用場面、使用頻度についての経験。

出現状況：2名 (L2 習熟度高グループ)。すべて転移可能性値が最も高いとでた equivalent pairs の言語報告内に出現。

「経験の転移」の内容は、ある言語形式の使用場面や使用頻度に関するものであった、との結果がでているが、それはすなわち、経験が社会語用論的知識 (sociopragmatic knowledge) の源になり得るものであることを意味する。しかし、すべての経験が目標規範と同様の社会語用論的 knowledge source になるとはいえないことが本研究の言語報告の分析により明確になっている。実際に、この knowledge source が出現した 3カ所のうち 1カ所については CEP の言語報告内であり、FEP の言語報告内ではなかったことから、経験を基に、「機能」に関して、目標規範と等しい帰納的判断ができるとは限らないことがわかる。また、「経験の転移」の後、それを源として「母語のシステムの適用」や「社会語用論的過剰般化」が引き起こされている箇所も実際に存在することから、経験の一般化が目標規範と異なった判断を招く場合もあることを示している。

以上、第 1 のリサーチ・クエスチョンに関して総合的に判断すると、被験者の思考過程には複数の knowledge sources が複雑に作用していることがわかった。Takahashi (1996, p. 213) は、“[This study] supports a ‘pluricausal view’ rather than ‘monocausal’ view of explaining the observed IL phenomena” と結論づけているが、本研究の質的アプローチによりそれが裏づけられ、それぞれの knowledge sources の作用についても明らかにすることができたといえる。

(2) 被験者タイプ別分析結果

次に、リサーチ・クエスチョン②についての考察を加えるため、各被験者の転移可能性値が最も高い equivalent pairs に現れた knowledge sources の種類や頻度などの面から、全被験者を類似したタイプ別に分類し、それぞれのタイプの傾向を示す (表 3. 被験者タイプ一覧)。

1) L1 影響型 (L1 influence Type)

定義：各 knowledge sources の中で「母語の影響」の出現割合が最も高く、かつ共

表 3. 被験者タイプ一覧

被験者タイプ	定義
L1 影響型	・「母語の影響」の割合が最も高い
過剰般化型	・「過剰般化」の割合が最も高い
インストラクション影響型	・「インストラクションの影響」が2カ所（または2種）以上出現
経験型	・「経験の転移」が2カ所以上出現
多種型	・knowledge sources の種類が多い
少種型	・knowledge sources の種類が少ない
L1 影響・過剰般化共存型	・「母語の影響」と「過剰般化」がほぼ同じ割合で出現

起している knowledge source が「語用言語学的過剰般化」のみ、または他の knowledge sources が出現している場合でも1回のみである被験者。

特徴：9名がこれに属する。L1に依存した判断を行うことが多く、比較的即断（判断を下すまでの時間が短く、そこに他の種類の knowledge sources が入らない）で判断を下す。例えば「でしょうか」が would と同じであるというように、日本語訳と英語の言語形式を1語1語照らし合わせるなど、被験者の注意（attention）が、言語の機能ではなく形式に向いている。

2) 過剰般化型（Overgeneralization Type）

定義：各 knowledge sources の中で「過剰般化」の出現割合が最も高い被験者。

特徴：3名。典型的な「過剰般化型」被験者の言語報告に共通しているのは、過剰般化するポイントが類似している（過去形の法助動詞や please の機能について）点に加え、過剰般化の傾向も同じである（実際の L2 コンテキストでの丁寧度より高いという一般化）。ある被験者は、would you と please の「丁寧度」が高いと述べたあと、would you が英語コンテキストで使用された場合は丁寧すぎるのではないかと述べている。つまり would you の丁寧度が、実際の L2 コンテキストでの機能よりも高いと判断している例といえる。

105

3) インストラクション影響型（Instructional effect Type）

定義：「インストラクションの影響」が2カ所以上（または2種類以上）出現し、かつ共起している knowledge sources が「母語の影響」と「語用言語学的過剰般化」のみである被験者。

特徴：3名（L2 習熟度高グループ）。インストラクションの内容について非常に詳細に述べている。

4) 経験型（Experience Type）

定義：「経験の転移」が2カ所以上出現している被験者。

特徴：1名（英語圏在住経験 365 日以上、L2 習熟度最高）。

5) 多種型（Large Variation Type）

定義：多種の knowledge sources が出現している被験者。

特徴：1名（L2 習熟度高グループ）。5種類の knowledge sources が共起している。

6) 少種型（Small Variation Type）

定義：出現した knowledge sources が少ない被験者。

特徴：1名（L2 習熟度が全被験者中2位）。発話が極端に少なく、沈黙の時間が長い。

7) L1 影響・過剰般化共存型 (Co-occurrence of L1 influence & Overgeneralization Type)

定義：「母語の影響」と「過剰般化」がほぼ同じ割合で出現している被験者。

特徴：4名（1名がL2習熟度高グループ、3名は低グループ）。感覚が優先しており、knowledge sourcesが少なく、判断を下す際の判断基準について明確に意識化されていないとみられる。

以上7種の被験者のタイプを習熟度の面から検証すると、傾向としては高習熟度の被験者群にはさまざまなタイプ（7種類）の被験者が混在しているのに対し、低習熟度の被験者群には3種類のタイプの被験者しか存在しておらず、とくにL1影響型が7名と、約6割を占めている。そこから、L1影響型が低習熟度の被験者に特徴的なタイプであると一般化できる。ここからいえることは、低習熟度の被験者の場合は、言語形式に意識が集中するあまり機能に注意が向きにくいということではないだろうか。これは、Bardovi-Harlig & Dornyei (1998, pp. 249-251) の語用論的誤りと文法的誤りの意識 (awareness) の違いに関する研究の、L2習熟度の低い被験者は、語用論的誤りよりも文法的誤りにより敏感であり、L2習熟度の高い被験者は逆に文法的誤りよりも語用論的誤りに敏感であったとの結果を支持するものと考えられる。L2習熟度が低い場合、文法的特徴へ注意を払うことが精一杯で、語用論的特徴には注意が向きにくくなるということを示唆しているといえる。

次に、高習熟度の被験者群のうち最も多いのが「インストラクション型」の被験者（3名）である。これは低習熟度被験者群には全く存在しないため、高習熟度被験者群に特徴的なタイプであるといえる。Robinson (1992, p. 63) の研究においては、英語習熟度が中級の被験者が、インストラクションの影響について述べる傾向があるとしているが、Robinsonが中級と位置づけた被験者群と本研究における高習熟度の被験者群の相関が明確でないため、単純な比較はできない。ただし、Robinson (1992, p. 63) は、英語習熟度が高いグループに属する被験者は「経験からの帰納的な学習」（本研究における「経験の転移」にあたる）について言及したと指摘している。これについては、本研究で「経験型」の被験者が高習熟度グループに属していることや、knowledge sourceとしての「経験の転移」がいずれも高習熟度被験者群に属する被験者の言語報告中に現れたことにより、大筋で支持できたとみなすことができる。

4. 結論

(1) 研究結果の要約

本研究では、主に次に挙げる2点の結果が得られた¹²。まず第1の結果は、日本人英語学習者が依頼ストラテジーの転移可能性判断タスクを行う際、その思考過程には「母語の影響」、「過剰般化」、「インストラクションの影響」の3つのknowledge sourcesに加え、「経験の転移」も作用しており、被験者の転移に関しては複数の原因が関与しているとみられることである。また、以上4つのknowledge sourcesにはそれぞれ異なった作用があることもわかった。「母語の影響」は主に日英依頼ストラテジーの「言語形式」を比較する段階に働き、「過剰般化」は「機能」を比較する段階に働く。「インストラクションの影響」は日英の基礎的な対応関係を築き、強化する役割をもつ。「経験の転移」は社会語用論的知識の源となるとみられる。

第2の結果として、英語習熟度も少なからず影響を及ぼしていることがわかった。習熟度が低い被験者には、「母語の影響」に頼るタイプが多くみられた。これはつまり、L1とL2の比較の際に、言語形式の比較のみに注意が向けられ、機能の比較を行うことが少ないことを示してい

る。また、習熟度の高い被験者にはさまざまな knowledge sources に頼るタイプが混在していることから、より複雑な思考過程を経ていることが推測される。

(2) 今後の研究の可能性

本研究は、転移可能性の知覚レベルの思考過程の研究であったが、今後はそれを産出レベルの思考過程の研究と結びつけることが必要である。具体的には、本研究で使用した状況の談話完結タスクを被験者に課しながら発話思考法と回顧インタビューを行い、その後同一被験者に対して転移可能性判断アンケートを課しながら同様な質的データを収集するなどして、前者と後者の関連を見ることが考えられる。それにより、転移可能性知覚が産出に結びつくまでの思考過程が明らかになり、さらに進んだ思考過程の解明につながることを期待される。

註

- 1 本論文は 2004 年に立教大学異文化コミュニケーション研究科へ著者により提出された修士論文が基となっている。
- 2 実際には、Takahashi (1992; 1993) がその前身として存在し、Takahashi (1996) は 1995 年の博士論文が基となっている。
- 3 「ストラテジー」とは、Takahashi (1996, p. 193) において「語用言語学的慣用法」(pragmalinguistic convention) と定義づけられている。
- 4 性別に関しては Takahashi (1995; 1996) では全員男性、本研究では全員女性である。中間言語語用論研究における性別の役割に関しては 2 つの全く異なった立場があり、性別が研究結果に影響するとする立場と影響しないとする立場がある。このうち前者では、女性のほうがより語用論的能力が高いとされている (Kasper & Rose, 2002, p. 281; Kasper & Schmidt, p. 163)。本研究は質的研究であることから、語用論的特徴に対してより敏感であると予測される女性のほうが発話データ収集に適していると判断した。
- 5 ただし、これらの数字は、転移可能性値算出の際には、1 から 7 までの正の整数の 7 段階に換算した。転移可能性値の公式については註 7 を参照。
- 6 言語報告の言語について、L1 か L2 のどちらを採用するのが有効かという問題は広く議論されてきている。Robinson (1992, p. 68) によれば、被験者自身に使用言語を選択させることが妥当であり、そのためには被験者の L1 と L2 のそれぞれの母語話者が調査チームに加わり、両方の言語に対しての深い理解がある環境下で調査が行われることが理想的であるとしている。しかし本研究は、チームによる共同研究の形態をとることが不可能であったため、験者が日本語を L1 とする日本人 1 名となり、事前説明などもすべて日本語により行われた。それが実際のデータ収集開始以降の被験者の言語選択に影響したと考えられる。ただし、本研究の被験者は Robinson の ESL 環境とは条件が違い、EFL 環境で日常的に L2 を使用しない被験者群であったことから、被験者の L1 である日本語が最も自然な発話を促すと予測され、本研究の日本語によるデータ収集は妥当と考える。
- 7 Takahashi (1996, p. 201) に定義された転移可能性値の公式は次のとおりである。
「転移可能性値」＝「L1 依頼ストラテジーのコンテキスト上の適切性の知覚値」＋「L1-L2 のコンテキスト上の適切性の等価性の知覚値× 0.54」
- 8 本論文の基となった修士論文においては、この他に依頼負荷の側面からの分析も行っているがここでは割愛する。
- 9 これは L1 のルールを L2 でも使用できると拡大解釈していることになり、過剰般化の一例とも解釈可能であるが、本研究においては「母語の影響」の下位分類と定義づけ、過剰般化はあくまで「L2」のルールを拡大解釈している場合とする。
- 10 相対 (relative) に対する絶対 (absolute) のことを指す。この場合の「絶対的判断」は「A と B を比べてより丁寧なほうはどちらか」という AB 間の比較ではなく、「A は C であり、B は D である」というように C、D などの何らかの普遍的な基準が介在している場合を指す。

- 11 FEP = Functional Equivalent Pair (機能)、CEP = Conventional Equivalent Pair (慣用法) を表す。具体例については表 1 を参照。
- 12 本論文の基となった修士論文においては、転移可能性値の側面からの補足分析により第 3 の結果を導き出しているが(転移可能性が高い場合には「母語の影響」が出現することが多く、転移可能性が低い場合にはそれが少ない。「社会語用論的過剰般化」が出現すると転移可能性が低くなることから、被験者が L1 に頼ると転移しやすく、何らかの社会変数について意識している場合には転移が起こりにくいということがいえる)、ここでは割愛する。

参考文献

- Bardovi-Harlig, K., & Dornyei, Z. (1998). Do language learners recognize pragmatic violations?: Pragmatic versus grammatical awareness in instructed L2 learning. *TESOL Quarterly*, 32, 233-262.
- Ericsson, K. A., & Simon, H. A. (1984). *Protocol analysis: Verbal reports as data*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Green, A. (1998). *Verbal protocol analysis in language testing research: A handbook*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grotjahn, R. (1987). On the methodological basis of introspective methods. In C. Faerch & G. Kasper (Eds.), *Introspection in second language research* (pp. 135-158). Clevedon: Multilingual Matters.
- Jourdenais, R. (2001). Cognition, instruction and protocol analysis. In P. Robinson (Ed.), *Cognition and second language instruction* (pp. 354-375). Cambridge: Cambridge University Press.
- Kasper, G. (2001). Classroom research on interlanguage pragmatics. In K. Rose & G. Kasper (Eds.), *Pragmatics in language teaching* (pp. 33-60). Cambridge: Cambridge University Press.
- Kasper, G., & Rose, K. R. (2002). *Pragmatic development in a second language*. Malden: Blackwell Publishing, Inc.
- Kasper, G., & Schmidt, R. (1996). Developmental issues in interlanguage pragmatics. *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 149-169.
- Kellerman, E. (1983). Now you see it, now you don't. In S. M. Gass & L. Selinker (Eds.), *Language transfer in language learning* (pp. 112-134). Rowley, MA: Newbury House.
- . (1986). An eye for an eye: Crosslinguistic constraints on the development of the L2 lexicon. In E. Kellerman & M. Sharwood Smith (Eds.), *Crosslinguistic influence in second language acquisition* (pp. 35-48). New York: Pergamon Press.
- Robinson, M. A. (1992). Introspective methodology in interlanguage pragmatics research. In G. Kasper (Ed.), *Pragmatics of Japanese as native and target language* (pp. 27-82). Honolulu: Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawaii at Manoa.
- Rose, K., & Kwai-fun, C. N. (2001). Inductive and deductive teaching of compliments and compliment responses. In K. Rose & G. Kasper (Eds.), *Pragmatics in language teaching* (pp. 145-170). Cambridge: Cambridge University Press.
- Takahashi, S. (1992). Transferability of indirect request strategies. *University of Hawaii Working Papers in ESL*, 11(1), 69-124.
- . (1993). Transferability of L1 indirect strategies to L2 contexts. In L. F. Bouton & Y. Kachru (Eds.), *Pragmatics and language learning*, monograph series vol. 4 (pp. 50-84). Urbana, IL: Division of English as an International Language, University of Illinois at Urbana-Champaign.
- . (1995). *Pragmatic transferability of L1 indirect request strategies perceived by Japanese learners of English*. Unpublished doctoral dissertation, University of Hawaii at Manoa.
- . (1996). Pragmatic transferability. *Studies in Second Language Acquisition*, 18(2), 189-223.
- . (2000). Transfer in interlanguage pragmatics: New research agenda. *Studies in languages and cultures*, 11, 109-28.
- Thomas, J. (1983). Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics*, 4(2), 91-112.

付録A

転移可能性判断アンケート（セクションA：L1 適切性知覚）

Instructions:

この Section には 2 つの『依頼』の場面があります。これらは、すべて『あなたから先生への依頼』の場面です。

[中略]

各場面の記述の下には、会話の出だしの表現があります。それに続き、5 つの日本語の依頼表現が提示されています。この内、下線部分に着目して、それが、その場面において、どの程度適切な表現であるかを判定してください（- 3 から 3 までの判定番号を○で囲んでください）。

例題)

あなたは、教育学のコースのレポートを書くために、数人の大学の先生にアンケートの記入をお願いしました。ところが、そのうち、A先生だけが、まだ記入して返してくれません。レポートの提出が4日後に迫っているので、あなたはA先生の研究室を訪ね、早くアンケートを記入して返してくれるよう頼むことにしました。

『あのう、先生、例のアンケートなんですが、

(1) もう4日後にレポートを提出しなくてはならないので、早く記入して返してくださいませんか

-3	-2	-1	0	1	2	3
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+						
全く不適切だ			わからない			実に適切だ

[後略]

転移可能性判断アンケート（セクションB：L1-L2 等価性知覚）

Instructions:

[中略]

各場面の記述（日本語／英語）の下には、会話の出だしの表現（日本語／英語）があります。それに続き、日本語と英語の表現がペアで10組用意されています。各組（ペア）、日本語／英語とも、下線部分に着目してください。そして、下線部分の英語依頼表現が、それに対応している下線部分の日本語依頼表現と、その場面において、どの程度同じ適切さを表しているかを判定してください（- 3 から 3 までの判定番号を○で囲んでください）。例えば、下の例題（1）の場合、日本語表現は、大学の先生に対して使う依頼表現としては、かなり適切だと判断されますが、英語表現のほうはかなり直接的で、この場面においては必ずしも適切でないと判断されます。したがって、この場面では、その英語依頼表現は、対応している日本語依頼表現とは、全く違った適切さを表していると判定されます。

例題)

あなたは、教育学のコースのレポートを書くために、数人の大学の先生にアンケートの記入をお願いしました。ところが、そのうち、A先生だけが、まだ記入して返してくれません。レポートの提出が4日後に迫っているので、あなたはA先生の研究室を訪ね、早くアンケートを記入して返してくれるよう頼むことにしました。（この例題では、『英語』の場面記述は省略します。）

『あのう、先生、例のアンケートなんですが、

(1) もう4日後にレポートを提出しなくてはならないので、早く記入して返していただけませんか。

Since my paper is due in four days, fill out the questionnaire and return it to me soon.

-3	-2	-1	0	1	2	3
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+						
全く違う			わからない			全く同じ

[後略]

付録B

転移可能性判断アンケート時配布資料内容（調査手順）

データ収集の手順

〈第一部〉

アンケート（選択式）の記入

- ・すべての問題文を声に出して読んでください。
- ・その時、頭の中に浮かんでいることをすべて口に出してください。
- ・選択する答えが決まるまで、頭の中で起こっていることを実況中継してください。
- ・選択する答えが決まったら、それも口に出して言ってください。

〈第二部〉

インタビュー

- ・アンケートを記入していただく間に録音したものを一緒に聞きながら、随時止めて、こちらから質問をしますので、それに答えてください。